

昭和SPレコードで辿れば 敵機爆音集

SPレコード収集家■城内 實

(一)

一 昨年のことであるが、筆者が学生時代に比較文化の講義でお世話になった平川祐弘先生から、戦時中に「敵機爆音集」を聴いた記憶があるとお手紙を頂いた。

この「敵機爆音集」は昭和十八年八月頃、ニツチクから発売されたレコードである。ある収集家の話によると、NHKがこれを大変稀少なレコードとして取り上げたことから、このレコードをたまたま所有していた人がインターネットのオークションで百万円で売りに出したそうである。

その番組を見てかどうかわからないが確かにある骨董市でこれが四万円で売られていた。店

主はきつとこのテレビを見た素人の客をあてこんでこんな法外な値段をつけたのであろう。

ところが、このレコードは当時十一歳の平川少年ですらその実物を見たことがあり、偶々行った骨董市でも売られ、筆者もだいぶ前から所有していることからしてそんな稀少盤であるはずもなく、程度の善し悪しにもよるが、専門店でせいぜい一万円の値が相場の代物である。

(二)

この四枚組のレコード「敵機爆音集」は、皇軍が鹵獲したボーイングB17D、ロッキード・ハドソン重爆機、カーチスP40戦闘機等を高度一千、三千、五千メートルに飛ばし爆音を録音するとともに解説を付したものである。

である。

空襲が本当に現実味を帯びてくるのは、昭和十九年六月に九州にB29が来襲してからのことであろうが、その数年前から防空監視体制は着々と固められており、国民の防空意識を高める歌が発売された。

例えば喜劇役者の古川ロッパの歌で昭和十六年一月日本コロムビアから発売された「ロッパの防護団長」は、国民服に身を固めた人たちのバケツさばきや空襲警報のサイレン、防空壕の様子が歌詩から伺えて実に興味深い。二番の歌詩を紹介する。

防空演習のその時は
めつきり忙し防護団長

(さあ来たぞ)

敵の飛行機見極めて
おさおさ用意は怠らぬ

(明かりを消してくださいよ、そこを通る人明かる過ぎますよ、なに禿頭だって、それでは帽子を被ってちょうだいよ)

ぼくらの防護団長は
愉快的な元気な人気者

(三)

昭和十六年十二月八日の大東亜戦争勃発直後に日本ビクター及び日本コロムビアの二大レーベルで、「空襲なんぞ恐るべき」、「なんだ空襲」が発売された。東日・大毎、防衛総司令部、陸軍省選定の国民歌である。

「なんだ空襲」の方は大木惇夫作詩、山田耕筰作曲であるが、防衛参謀陸軍中佐難波三十四作詩、飯田信夫作曲の「空襲なんぞ恐るべき」の方が格調が高く、佳作である。この曲をビクターは柴田睦陸、コロムビアは片腕伍長の伊藤武雄といずれも東京音楽学校出身の正統派歌手に歌わせている。

空襲なんぞ恐るべき
護る大空 鉄の陣

老いも若きも 今ぞ立つ
栄えある国土防衛の
誉れをわれら担いたり
来たらば来たれ 敵機いざ

この時期空の要塞と言われた
爆撃機B17が既に実戦配備につ
いており、昭和十七年六月には
古関裕而作曲で藤山一郎、二葉
あき子が歌う「防空監視の歌」
がコロムビアから発売された。

一番の歌詩は次のとおりである。

御国の空を尊い空を

ぐつとにらんだこの目だ耳だ

油断大敵 蛇一匹も

ただはのがさぬこの目だ耳だ

無敵皇軍 勝利のしらせ

聞けば聞くほど心はしまる

御国の空は鉄壁だ

(四)

昭和十八年に入ると皇軍はガ
ダルカナル島からの撤退を余儀
なくされ、連合艦隊司令長官の
山本五十六がソロモン上空で戦
死、アッツ島の守備隊も全滅し、
戦局はますます悪化を辿った。

陸軍省報道部推薦、防衛総司
令部指導の「空に風あり」とい

う超稀少盤を昨年偶然手に入れ
たが、空襲に対する切迫感が良
く描かれている。

この盤はレコード番号から推
測するに昭和十九年二月頃の発
売である。

空に風あり雲を呼び
鉄と猛火の雨降らす
秋は来たれり國なくて
なんぞ名譽ぞ生命ぞ

家が焼ければ野に臥して

草を食んでも護り抜け

大和島根は三千年の

歴史輝く神の國

夫斃れりや妻が立て

母が斃れりや子が代われ

血潮一滴ある限り

寸分ゆるがぬこの護り

物が頼みのアメリカの

魔手に躍らぬ健男児

生きて奴隷となるよりは

死んで護國の鬼となれ

(音盤からの聴き取りによる)

(五)



昭和二十年一月には本土決戦
を意識した「来らば来れ」とい
う曲がサトウハチロー作詩古賀
政男作曲でニッチクから発売さ
れた。その五番の歌詩は次のと
おりである。

どこの言葉かこちや知らぬ事

爆弾落として神経戦

家が毀れりや直ぐ建て直す

ただそれだけの事ですわい

ソレ事ですわい

また、同じ頃に富士音盤から

「神風節」が発売された。

「敵の自慢のへなへなとんぼ

たたき落として こな微塵」

という大変勇ましい歌詩であ

るが、B29は「へなへなとん

ぼ」どころではなかった。

これらの音盤が発売された後、

B29の編隊爆音と単機爆音の二

枚組のレコードがニッチクで製

造され、三月発売予定で当時の

雑誌の広告にも掲載されていた。

ところが、こちらの方は「敵機

爆音集」とは異なり、収集家の

間でも幻の音盤でその現物が未

だ確認されていない。また、こ

のレコードの番号以降のニッチ

ク盤はどこを探しても一枚も見

つからない。

このことから、このB29爆音

盤は川崎のニッチクの工場で製

造された後、輸送の途次まさに

B29の猛火に遭い灰燼に帰した

としか考えられない。だとする

と何たる皮肉なことか。(続く)